『とりかへばや物語』冒頭にみる もう一つの〈ねじれ〉について

近藤雅子

中世初期に、古い形態から現存する物語に再編されて成立した『とりかへばや物語』（今とりかへばや）は、男女の性の入れ替わりを題材とした作り物語であり、「異母きょうだいの性役割の転倒とその本来期待される姿への復帰」（辛島正雄・日本古典文学大事典／明治書院）の物語である。冒頭では、この物語の主人公で、実際の性別とは異なるねじれた性で成長する二人のきょうだいが登場するが、この部分における季節の描写の〈ねじれ〉について、気付いた点を述べてみたい。なお、本文は『新編日本古典文学全集　とりかへばや物語』に依拠した。

物語は、権大納言大将に二人の「北の方」がいて、それぞれに子どもが生まれるところから始まる。異母きょうだいである男君・女君は瓜二つであるが、内気な男君は女姿で、活発な女君は男姿で成長していく。その様子を見て、子ども達の父大納言は二人を「とりかへばや」と嘆くのである。

二人の妻はともに「北の方」であり、同時期に子をもうけており、また権大納言の妻たちに対する扱いも平等のようであるが、そこには差が存在する。作者が、二人の妻に差をつけているのである。まず、二人の妻、源宰相の娘と藤中納言の娘の登場の順である。「源の宰相ときこえしが御むすめ」腹に「いとど世になく玉光る男君」が、そして「藤中納言ときこえしが御むすめ」に「姫君のいとうつくしげなる」が生まれる、という順で登場し

てきている。記述の順序では、源宰相の娘が優位にある。また記述内容も、藤中納言の娘の記述に比べ、源宰相の娘の方は、性格などに言及してあり、文章量が多くなっている。その他、源氏と藤原氏とでは、もと皇族である源氏の方が優位である。また、あてがわれた対の屋が、源宰相の娘が東の対の屋、藤中納言の娘が西の対の屋であることに注目した森本葉子氏は、『源氏物語』若紫・玉鬘や『栄花物語』などの例から、西の対より東の対の方が格が高いとしている（『とりかへばや物語』考――逆転する二人の北の方――「愛知淑徳大学国語国文」第二二号）。

源宰相――北の方
　　　　　　├――男君
権大納言大将
　　　　　　├――女君
藤中納言――北の方

（登場人物略系図）

つまり、男君の母である源宰相の娘の方が、女君の母である藤中納言の娘よりも優位にあるのである。しかし、続く本文では、「異常性」は男君に、より強く表現されることになる。

物語では、場面設定の後、父大納言が二人の子どものもとを訪ねるシーンがある。彼はまず、東の対に男君を訪ね、その後に西の対の女君を訪ねる。ここでも前述の通り、男君側、つまり源宰相の娘の方が、女君側の藤中納言の娘よりも優位にあることが分かる。

問題になるのは、父大納言の見た、男君の描写である。本文中「姫君」とあるのは、男君のことである。

春のつれづれ、御物忌にてのどやかなる昼つ方、姫君の御方に渡りたまへれば、例の御帳のうちにぞ箏の琴を忍びやかに弾きすさびたまふなり。女房などここかしこに群れ居つつ、碁、双六など打ちて、いとつれづれげなり。御几帳押しやりて、「などかくのみ埋もれては。盛りなる花のにほひも御覧ぜよかし。御達などもあまりいぶせくものすさまじげに思ひてはべるはや」とて、床に押しかかりて居たまへば、御髪は丈に七八寸ばかり余りたれば、花薄の穂に出でたる秋の気色おぼえて、裾つきのなよなよとなびきかかりつつ、物語に扇を広げたるなどこちたく言ひたるほどにはあらで、これこそなつかしかりけれ、いにしへのかぐや姫も気近くめでたき方はかくしもやあらざりけんと見たまふにつけては、目もくれつつ、近く寄りたまひて、「こは、いかでかくのみはなり果てたまふにか」と、涙を一目浮けて、御髪をかきやりたまへば、……

父大納言は、男君の居丈にあまる長い髪を見て、「花薄の穂」を連想し、「秋のけしき」を感じたのである。この部分ついて主要注釈書は次のように注記しているが、いずれも季節についての説明はない。

・「新釈とりかへばや」（田中新一・田中喜美春・森下純昭／風間書房）
「花薄の穂に出でたる秋のけしき」――毛筋がきれいに整っている様をいうか。

・新日本古典文学大系「とりかへばや物語」（今井源衛・森下純昭・辛島正雄校注／岩波書店）
「花薄」はすすきの尾花。髪がきれいにそろっている様。

・新編日本古典文学全集「とりかへばや物語」（三角洋一・石埜敬子校注訳／小学館）
「花薄」は、穂の出た薄。髪の裾がふっさりとして毛筋が揃っているさまの形容。

＊講談社学術文庫「とりかへばや物語（1）」（桑原博史／講談社）と、中世王朝物語全集「とりかへばや」

（友久武文・西本寮子校注訳／笠間書院）はともに注記なし。

髪の形容に「花薄」を用いる例は、『枕草子』「野分のまたの日こそ」にも見られる。

（角川文庫『枕草子（下）』一九一段より引用）

野分のまたの日こそ、いみじうあはれにをかしけれ。立蔀、透垣などの乱れたるに、前栽ども、いと心苦しげなり。大きなる木どもも倒れ、枝など吹き折られたるが、萩、女郎花などの上によころばひ伏せる、いと思はずなり。……（中略）……ものあはれなるけしきに見いだして、「むべ山風を」など言ひたるも心あらむと見ゆるに、十七、八ばかりにやあらむ、……（中略）……薄色の宿直物を着て、髪色に、こまごまとうるはしう、末も尾花のやうにて、丈ばかりなりければ、衣の裾にはづれて袴のそばそばより見ゆるに、……

『枕草子』では、秋だから、髪の描写に秋の尾花を連想したのであろう。しかし『とりかへばや物語』のこの場面の季節は春なのである。父大納言は、春に花薄の穂を連想し、「秋の気色」までも感じた。これが、「異常」なのである。『礼記』「月令」を意識し、季節の流れを重んじていた古代人にとって、春の季節にこの秋の描写は明らかにおかしい。特にこの場合、「ズレている」のではなく、百八十度〈ねじれ〉ていると言ってもよかろう。

この部分では、さらにもう一つの〈ねじれ〉が表れている。

陰陽五行説では、「東―春」・「西―秋」の組み合わせになっている。『源氏物語』「少女」で実現する光源氏の六条院が、この陰陽五行説を意識して配されていることは、今さら言うまでもあるまい。植田恭代氏は『源氏物語事典』（大和書房）で、六条院の構造の思想的な根拠に「易教」の方位観をあげる説があることを紹介している。

また豊島秀範氏も、同書において、「それぞれの季節を象徴する町に住む女性と融合させて四季を司ろうとする六条院の構想」を指摘している。つまり、辰己（南東）は「春の町」で紫の上の住まいであり、未申（南西）は「秋の町」で秋好中宮の住まいになっており、「東―春」・「西―秋」の組み合わせが見て取れる。

しかし『とりかへばや物語』では、父大納言が「東の対」にいる男君に、春ならぬ「秋のけはひ」を感じているのである。これは、陰陽五行説にみる照応関係に合致せず、まさに百八十度〈ねじれ〉ていると言ってよい。

冒頭部分では、優位な条件であったはずの源宰相の娘腹の男君の方にのみ、現実の季節や場所とねじれた表現がなされることで、権大納言の二人の子どもの異常性は、男君の方により強く表出されていることが確認されるのである。それだけに、父親としての権大納言の落胆も大きかったのであろう。

（博士前期課程二年）